KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

中村俊定文庫
文庫 18
909

五韻君

俳家新聞

芝文二筆　基秀

俳家新聞

此書は俳士の新聞を集て四季の
活字板を摺て三都は云及ず遠国
諸国に送て好事の俳士の目をもよろこ
ばしむる為に載んを願ふ作者さまざまの
新作海内の佳句編輯相
成て裨益あらんを祈るなり諸
俳子各々秘惜なく其作を寄せ
給へを希ふ也

江戸三吟

蕎てをつすろ為ゝきぬ柳うゝ　培堂
捷らうを紅より見せる雪達うゝ　〃
黄色の花に日入るうと帰れうゝ　〃
梅葉るおり出野清しゝ為のおと　培外女
松山を過て野孤花りゝ飛　〃
麻るおもしろき月夜世間ゝ　遂外女
明けの雲も消て初子めの日　〃
日も暮て爰とひちる雅梅うゝ　為山
　　老懶

咲花孤ゝうもきさまおをひ色る　〃
雛見せやうゝ日も明るゝ汐汀　見外

上野

人去うゝ寂江うゝ雲ゝ雁ゝ　〃
雲たらう舞ふ天平ゝ迄ふ田鶴　管哉
明ゝ渡をおさゝ付ゝうゝ　〃
月かゝるゝ花さ迄加減め柳ゝ飛　春湖
酒子の書ゝうゝふ為りと長宋ゝ　〃
七ゝえり池上まてめ芳の花をり
蓋なけて四望も見る為初きゝら

そつうえの皺引すれは素一の那り
腥きて一トむらつゝやなきなり
梅遅し氷室もゆりやなし山
ふ川をや木母ちまて又は比と木
ありさまか肥て知と水や畑の桃
其さ頃やりしわつ成りり夕柳
手らり出き帆の名まくさき素ゆ
形るたけよ爪ゆつくる世なきゆ
まさきうぬ系は下ゟお布ろなり
香ハ瀬ぬ昔にましぬ浮ふり海苔

影衣紋坂柳

前ち月うし流ハ小田のやなき川
江戸ちゟ出男ゑうりし梅のちれ
東海苔や妻も二夜因は伊勢役
人乃背ゟし森てやし猿や梅の花
耕ありと言ふて通るや琵琶法師
まことあ川柳すお見る本出りゟ家
御奈風にとてなさりしや小藪ぇ
添壺や添ゟうくまれ色とは隊る
案は戸をひふけハ来るや妻の香

、氷　壺
、義　兄
、禾　中
、甘　志
、花　外
、五　休
、木　曉
、風　雛

火は争なきうハ無りなり　宿の妻
　初卯は日臥ゐの園
人一國う欠ま遅速多見え出なり
月のなき宵やともさき睦月う那ま
国あらき中やほつうり梅の花
ちつえもつゝれうし所や法の香
跡てなく咲て驚ぬくさうつゝか事
春の夜や笑ひ消さましし小ゆ灯
十人うしむとり見て中し折ゟ香
気角しそ鈴へもうらむ所ニうふ
崇に来よと呼子むく洪は霞ゟれ
朱風吹や何に火を焚く野の煙
里は了免緩うらめれハ見へ上気
ゆハ垂乎見へぬ日うけの座眉り
不忍や生きてふ日よりうふ歩
海苔案に咲とちろのあ於有衣什
留守は戸や蝶の窓うとさし耿く
喜見残竜うし見せへぬ風の時そ
荻咄しや逐の志うけむるの面き
欸面子木せうるなしそ百る香

、香　陽
、序　流
、きく雄
、言　年
、芳　竹
、えき雄
、酒　旋
、佳　節
、里　紹
、段　路

門松重かくて春のゆふ風うなゐ
うれいし社殿やゆふ風さこと
雪をへうさとさて春の様うれ

砂村元八幡にて

ちよほ〳〵雪見〳〵夢名の名残ゆ
いのも見るおれうれ社殿ゆき
稼うしさんを迎むしゆや飛ふ蛙
うんひを社山をうしろに初芽ゆ
あゆを生ち皆出ちろ向く原形支ゆ
ちろ梅うゆいさら梅とれ成ようろ
菜の花や　変つとこと二三本
そっ深世人ちろうしうれふ根ろ
花の夢人のゆうろうも鶏さ蒸より
うを生しを馬を引ろそつ荷ゆ
初ろれと小舟はしを思ひ久
雪ゆうる味ゆ梅の日きしうれ

郊外

世義を楽りゆてう見のさすゆ
梅ろ香中庭形表の公さしふう
静に生れハ社ようれ形りし柳うれ

武江　五机　流登　白魏　白白　歌壷　青蓋　来芹　由地

明除も蓄きいもすう見原あき
夕べにようの家うし柳うれ
義塩てひろかる　綱や　忙ろこう

姿見橋上

東風は脈の撲ぬゆふや少しつ
ちうろ中すう菜を歩に除る自
揺にいの壁つる田とやうめのど
そよう田と茶も茶ろ辞ゆより
遠くゆ田を楽ハらに妻形月
あゆらしき日日社中や法若の味
香の来て小舟もて形す二月うゆ
吹生来さ頼かしゆて　物のろれ
二日に生徒こうろ歩ゆうれ
忘生もの買に出るゆ初ゆうう
癸ハ生うしゆ生きさ生ぬ蕨うれ
物見うしも作を見て小余老うれ
茶ろけや人のおら祝ハ引く蕨
立酒もお出見のうろよう見原
見形出くろゆ潮を見れ紙望し
月し孫見程ゆき原ろや梅うゆ

茅友　不除　恭民　末和　宜子女　長江　危水　尾西　孫風　貴乎　成伍　留我　芦磨

浪華の春日い秋よりまさりけり　介我
昼酒はさ先るるを梅の茅ろ　永機
一日のうまみやふ迄て夕ろ　宇山
ろ〳〵と出ぬ〳〵と上や種蒔し　幽止
出ろりや雪もまよさ暖日を惜む　書村
雪のゆ〳〵山ろ　指きを元方々　東陽
ゆるきい香え〳〵ろ爺ろうめ抹　仙也
水はゝりの襟かゆろ也松のむ　其英
春の日や木うひうゝとろ酒囲之
野のり〳〵き菱と菜花よ廣けりや
妻乃囚や鶏は出ぬ毛の水よ深く
元日の眼れ去ミろほとき以日ゆ
人出色よ来のやりろり梅のむ

南蕃れろ

冴ろ〳〵ろ紅やるつよき潮の玉と　章山

浜世界

下潜れ乳の青むや〳〵う先のむ　般永
るの時さ有れ鶯〳〵の花
出花前よ〳〵
ろうてい冷たくふいろ〳〵春の風

也よ合如人とてハ冬しうめの実　呂也
ほく炭もさすれて春らうを川性　里木
ひや〳〵と梢の紅ろ〳〵きゝ　芳泉
変りなろうろ見つさふや山さくら　梅哺
くゝ紅ろ乃頭さて〳〵梅花ろ支
書る日を遅ろ〳〵出ろ　夢は月
蓬莱よ〳〵ゆもろつくし日の埃了
ひすや　秋雪以ろ山の麓

屋敷乃ろい冬冬なき柳梅の繁茂い

梅咲てはよ〳〵ろまて冬き川辺ろ　対天
ちや乳ら〳〵一図や紅の猫柳　完路
家に居て野ゆ〳〵ろ〳〵はく睦月以　乙雄
面〳〵ろ世梅咲ろこかを梅のおや
書めこち〳〵面く春せ二度う二度
梅梅て梅を打るろを乳ろうけり　為外
年と〳〵の梅冬冬ろ春ろ日性寒　小雪
うゆ〳〵ろ〳〵作向く春や紅しつく

兄の昇進を賀して

うきゝ乃春る松井ともに祝分ろ繁　三朗
終ハまさ冬社寿ろうろ冬のたち

鍛冶屋に掃き寄せ置き江戸のまる
葱なら小梅の門川　こねり鉢
嵐吹く里や笑ひ　しんうち処は
淡よもうつせいうつる元方の系
常にあき知起もしく　おんこう系
閑尚りうるるる　彩や　花とを
ふつ寄り巳卯東さ　蓄や　神を
以ハ寄められて　清多　三日の月
臥す程を碑四まか　多や　花りう
金朱の雛を上坐へす　めりう
三巡へ　詣て彼西気の匂に感ぜ
因まおもに　粧ひつ　番ろ　ちる　樹
黄る形つ　ひさと　坐取て　芸見ろ
尹就を　せい　面の　ちら　つく　折る
うけろふや　今ろ　さすて　し　芥より
馬ぬし　在ぼ　へと　来ぬ　なり　梅の花
あも　付四　木かゆの　雲や　里の　梅
ろふ　ろわに　咲ほ　さを　ろ　樓ろ
花吹　雪地　ろ　蔵し　面く　蔵り　ろ
木ろ　ろを　掛り　て　摘む　菜山　北

冬甫、五雀、義拾、即堂、大喬、捐雨、
盍樟、次山、三禾、尋喬、弘渤、
蔵く

鮫洲の内うるを徒や水の芽味噌　陸平、
つ　咲日ひと　ちる　ぬ　紙草履　ま足、
西西の　角西り　る　山寺　原あ　ま北、
年礼も　たや　碁を　ろと　むも　ろ北、
はつ年ハ　歴ち　ろ　移る　ろ　めい北、
古雛ま　ろい　る時代め　みあ　ろ　り、
ろ　ろ　ろ　ろ　ま　ア　北つ　きぬ　梅り　花、
沈禮を　なの　ほ　ゆ　る　や　梅の　ろ　可仙、
ふ井粧ふ　き　ふ　ろ　る　葉種　ろ　ぬ蕉、
苗一　沈や　義孤清水　も　ろ　の付　く　梅北、
人ふを　尼一　そ　天命を　信と　はい　る
古言に　よりて
ゆれ　く　宇　黄色つ　ま　柳う　在京蕉露、
ま　さ　き　き　そ　梅ア　や　梅ユ　白拍子、
茅　ち　乃　迫つ　る　や　ゆ　ま　た　ま　り、
松　梅　ろ　り　ぶ　ろ　ふ　て　庵　る　ア　北　日北、
梅　ろ　蕾　や　一　梅　い　逸　ぬ　て　と　り　ふ　斗、
淡　く　さ　き　人　ろ　い　逢　に　ぬ　は　ゆ　ま　在筥舘葱　玉、
続　と　と　北　ち　ろ　硯　も　き　の　ち　る、
蕾　ゆ　ゆ　聲　北　教　北　ア　ち　ろ　、　、
、　、　、　、　、　、　、　、　、　、　、

一トさも迫みなる西うの山初をうの
紙付は看板ふれき屋なき事

墨水舟行　　卓郎

午時過る日をしるしやき花の沈む所
蓬莱やへ飛ぶしるしきなる海老の髭　　香城
碎て赤て花よ醒ふ多ふ時しるし水
咲も多ふ有るもあり有るもあり　　蓮の面
方今諸所の貴うりけまい

井田は出れい邪ふりいろの布り　　忍楽
多恵芽よ日い多ふりなうう　　花よ風
淫板よ脊伸しく進ふ胡壊うは
常盤木は実の赤きやへ　　三日の月　　青泉
もすかるしやてさい多へ糸瓜
西角へ多を掛ふ時ふく桂う多
山は時ふ方へも西くしやへ　　妻の多　　大虫
荒ちるや指を見の多しへ火歩石

大桶まで裏色く唐やへ　　梅は咲
時多ふりて吹まかまるへ　　春の雪　　京　芹舎
うへひ出を多あとの本ふる　　時

草菴

そこ出うう溢まるやふそ福寿艸　　少威
行出きく根る新出るうはつう
業苗やへ茨上う面を多ふ多を
多露を元よ西り消出る多きう新　　黙池
うすうう出さ出う八坂も山の
時られやう絵多う蕾をおほう月
瓜の緒新多　　百や子等の多恵競　　素陸
ふるうせに吹出やれう袖の緒　　駝う
糸さうおさ多きやうに先へ吹
翌日多咲う匂ひ多ちうう　　福寿艸
佐保姫新袖ふ新屋なきく事　　渓蘭
うへひすやを見てよいうと三多を　　雲角
見極くほやを桜見うう花の石
多の時うく猛よ蝶飛ふ日新うの
黄多に見うへ出いう小宮う新　　乗涛

鳥ともうせくさはねり香のさち
盃とけは〱の八天窓鏡中ま
梅きしや子ともの葉も船とあろ
きちつき八其役にしそ可ちしめ
梅の香や一里の道の右ひより
親は筆の子と小子尼田る妻兄は
名菜やとまち気たしま放きうう寺
結ひめのとけて柳のあわくう那
春かせやよい列きたろの雀あし
蓬莱や内掃同士もいとひけふ
相子つくや風に命ふて腕まくり
黄各も留るの句ひたや鞠のおと
吾名くや書なろる絵は具岩
壺は出来あう退しさうへ雛の数
人の手に拾つ菜お見うまたしき
鶯いさ中うれ戯くや夕やなき
蕗は芽も日かけ日えやしい座敷
よくきけハ妻ひの声や初手れ
川寸ちはぬるむためるり夷は直
吹くしもいそハあらうよ春の風

、兎丈
、貨舟
、雪秋
、碎月
、光廻
、手岳
、月拙
素碎更 、芸卿
、朧仙
、汀桑

吹立る野にゆけいめの気ちりけ
されうしま指の和まあし梅は花
咽うゝ孫句ひ進中しうまみうゑ
うけ移ふや薬つそ上しるより
れく眺るも流まう川はろ寸みふ
うくの寸や左う作りし捺は手え
臨うさりや枠まかけさも白の手
新海苔や年内出しの江戸役
あ記え一つの雲霞の床やつさひ原
里は子のおうとときぬ野梅く那
夷めくや紙をあての杖たしめ
名梅や被衣むろゝてし入る折戸
蓍たれを先の川し腰やし月と桃
豆腐屋の出荷係差し梅は先当
たとらこま似ある姿や淡路左ま
春面やはまりきのふハ書き壁ら
雀子の遊おほへたり遠水にみ
妻ろ世や波にそいらて帆已ふ矛
小隆りに古よし今はまじきろ孫
足ふ収也八幡も通てきしの乙荷

、美夫
、及花
、路夕
、波同
、澄節
在大津 、有芭
、
大坂 、警斎
、儀兄
、早宝
、湖水

澄む秋や　風いとゝ山の池
に一ぱいてうけひをおちぬ樓うゝ
一ト面せ砂ま吸ろゝ蔦めたふ
そる面せ根杏ま之ゝ夕うゝ
日も永う成さうの方拾ほとけ

訪室院

うゝ　ら〻　壊もう生ん庭の竹　艾園
我笠ゝ引くいおほえ沈ゝ書　夢輝
廣嶺吸せる歳をめふ方碑ま　傳雪
面せ見ゆゝ松ゝ吸ゝ　せつ弱　霞外
秋吸や　賢外目にまゝる味相鐵

宮津

浅茅ゆけてうまゝ下る中曲り坂　藤月
右ゝ一ゝ乃兼角ま吸う月と樹　大年
樹ゝ乃を大ゝ吸ゝ　ふやゝ二ま風　豊水
魚の沐二見ゝ　魚者ゝ二日ゝ飛
打ゝ乃く老の大捕や　うめ弧中
見る事を去りて紙り沈ぎの主
二ツ三ツ突て見て羽る仕ぎゝ
鈴ゝ乃ふ吸もゝ乃町中鈴ゝ生み

素屋
杜陸
五韻

松の内　梅為ぎ森　いゝ山り乃
毒ま紫の宮まれ八日乃著ま仕ゝ　陣　松
四九輪社内う本ま世吸や蕉の梅　雲推
梅社ゝと中ひゝ蔵や夕ゝ吸ゝ　宇
雲も見ゝ鈴ゝれ見て生る吸面　尺
風ゝ隔ふ桃見世ゝ梨蕉のきき　朱
鈴波浦吸ゝ　三梅蕉ま市吸中　可
生碑の郭ナ　て根退す　羽ゝの中　双
梅ゝ乃ゝ浪の吸ゝを女ゝ　焦
沙先ゝ見社中ふゝ　竹
ゝる面の云ま吸ゝ一日ゝ乃ゝ吸　浦
賀　辻
海老穂社鈴ま炙ゝ　梅日和　二
ふゝ巴ゝ古蕉のゝ　ゝ　蕉ま水　懐
荷ひゝ土に一ト様ずゝ　ゝ　梅
梅の海苔を蕉出す西の泊ゝ　ゝ　英
氏生ゝむのゝなゝ　ゝの鎖かゝ　人
沖鈴ゝ起いおきゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人
足ゝゝゝ供ゝ　世陸ゝ傀師　秋
桃ゝゝゝ日和ゝ　ゝの砂ゝ　烏

ことふ森ろくも蛙にちかき枕かな
きりと志き月夜よなりぬ梅の花
西照庵にて
志ら菱やまさ霄雪の庭にきそひ
青柳の雨ろ押ろ夜噌こう志ふ
ちきおと往走る元日の角界那ふ
ちつ午やかこりに露むき羽織手
梅出ふを頓往絶ゑやう気の玄ん
元日の聲まい世ゑし扨すて免
ゆやよくに日八精進や妻の西
狙板のおとろし蘇の王泪ひろ姫
象の来むる残見て
える風ふ吹ちらしうち象の鼻
山陰やそ走といふって一ト眠り
わ家の霊菱る方庵なり大根めし
まさられぬ菜にいふかる灯うれ
紋所のうつ走り兄へろしちろ独
梅りゆふ気ろし志うふむ様うれ
鶴志るしなりしなけゆく空の文
吟つけ寄しおき句き寺や梅の恋

、有誓
松門
、芹水
卜漾
左東
瓢古
杉宝
、菱舎
、三畝
宜候
昇左
、
、

咲さハとりへ抱て茶し松の光かな
梅老しきさもつひに山うく足
ふかくさもすろ走くや花さに
篇抱ろし響も眠るや太ろの面
伸ぬるをきうりありなり福寿草
御よりかくし余寒の外にふり
うらうくと門をえひきハ柳う那
もせ起往むく去見うりえるの雨
黄なるの等まし始そひや菜の木畑
ゆきふ田哉こころま番君ゆうし
ゑきえぬ野山まころろうつる时
今朝の春来戸ハよらむそうりこ
去平の月日営しりめ往ちこ
ありあけや障子にろ先ゆ梅の花
ぬさまし雪ハ永りてうめのまる
去年今年香おうへするきしき急
ゆるやうれ初旭けしるの海の上
吹ためさゆうにうせえぬ山ゐ語
うらひをのすま拂ふや杉ふも足
雫にむや松にかくるらんと去の

知風
、在江戸 石叟
、亀声
、兵庫 簫卜
、播广 連橋
長サキ 止得
、彼後 物外
、阿ハ 甚棲
左麦
、丸琴
、紀伊 梅隠

等拙作のきまて抑のせよきく仏
見るあけの力もしられたるの事　イセ路法

涙滅法大悲閣にて
くつろいて茶になる木の実
田作りや無ハよれわと脳のうへ　麦豊
戸ばくもい雲夜にひとりあと梅
蓋の香絶ち暖簾や　町のもる　文松
酒の香の夜風にたちて寒さ
外出先に寒ち戸をせて　山鳥　竹芥
えやす菜よ炬すふりや焼石君

宮中

うこひまや鉦ち免のもこし沒　耕雨
弁うたも皆西る町社ちすみち家
つらまるとの匂ひや夜の梅　松洞更寿青
冥婚や流しいまよる載せられる
来さ人ち時たつ祢ち三ケ日　松柏更隆重
魔の跡をはやしくなる如猫の恋
黄昏やかうりさきは日まる帰く　杞竹
新日あさあき咲ふりや星のう免
山そもり書出めちるかの潮　近江犠洞

来さ人ち扇出されて筆そし免
新年や手ものまるる屋社さら要　乙地
梅をけるかの松もるの日う事　香沙
あんかくや巻ちをまを迎し午時の淀
曳ちう一下位つく小松ち敷
雅大祇の塔すて沒りのもるの代　越セ宇治
ちく梅社山里まきちくこちの家
まる面や下雪のは沒ちくこ挟名　カ、清江
椽ちはくく空ふとん蔵くや梅日和　水圭
結ちちも芸社ちちはうはは　載中野路
首たて歳ちくめちやきの酌
巻ちは羽ちは載れて沒ぬはよひ取　揚城
道ここちあに入ちち麦の水
おち絞きまはちちよ小豆粥　エチコ彩史
終時の相喜のあとの余寒ちう志
沒うる雲のひすりやるの月　琴九
弥垣やきひを並くてう免のちは
隆やんさ面の小にやをつちは　古堂
春ちはさきくく二階のよちり
あにつくまてちちあるやおち楼

ゐもしいとなく口きひしきりふる霰
立うけて植木うらす庭あきかな
津清ほほまの江れ酒仮の煙巣かな
咲と共て下やみつくろふさらし
毎日のゐちめし客や梅の花
ちつ花やしいふ宿に南ちめ三日程

大叅院

西ふ様条のありあけ乱れかかり
えるかや也うらし茂す湖の浅
出つてもついて来るかりの春の風
杉川をあすら浅ても来るからみ江
彷ふ家を住みまりかり初さくら

大叅院

なをうか酬ひて見もや気をくる
黄鳥の霊にさへ世しちつ若ぞ
正月に日甲な有りけれハ
曳て茶よ小松とともに野大根
やかくくと月の蓍年き杵子那
見て居迄ハ淀むてかれし連の水
月代かしして吹や気めきるの風

、薩堂　、志扇　ヲハリ、栂裡　、我竟　、湘洲　、流翠　、烏暁

若竹の上やたとめて人のやく
露て居るを起しく見さし色乃畜
今おてまさ人もあり弟くかまつ
舟人外頼てまけやく座あきかな
或人外許より鉢盃を贈られて
きうつきの形ろも見え迄て松の内
衣の物おしのけて皆く蛙うか
うくふ見さ蓍も今形のう免の笠
兎る面外庭ふし湛へぬなかりけ

墨水院

おちこちのひと手まはゆてちよろ
草やうし渉う日の遠く流迄うな
えや杞かおそ寐もしきり年男
酒まして居る撥撚や田螺貞
えつ免の日きしの装ふや仮枷
西つくりのうらひて星ぬ齢か
黄鳥や居止む形の雨しくつくさ
咲い侍こころい失て花さかし
枝まんときるやきらし来る汐明
打盗かし暁麓あるみてまる計画

、百牛　、来梧　遠江、杜多　駿河、青渓　、九成　甲斐、竹良　、一凡　伊豆、士牧　相模、卓種　、草巴

垂士めむ〳〵ろ青〻ろ〻　奇妙風　塚皂

象潟よ祖翁め吟を感〳〵

鶴孫も〻松いのこりぬ五歩十歩　由岐雄

芝され樹〻殉りたきいろ世春袋

遺世

殉りふ事あきれはるさ〻〻弐

曳いやと見る松に居るかう事　ムサヒ　野井

荒磯や波ハ来ぬよりもう〻いらに　脇史

連翹〻つきて巳まい井筒ろ敷

生き人の見〻て居つ〻花見ろ

墨水眺望

花咲いはふききるさの堤哉

四角や妙孫ふきぬく松の雨　秀道

遠山孤雲より唱ろ〻もつ〻に　考之

波も来ぬ岩ろ流れてむるの雲

奥よ僧くさはりや緑ん海苔の味　涼花

蓬莱や色めるつ〻きて松孤鶴

船路の眼来ひき出すさす柳ろ敷　嘉山

福引のはと生ろ〻のまるる〻　星山

てら〻ら干す学もいさ〻〻て物野　西山

絶めたつ満ぬも来めやめ〻ろう事

画賛

牛画く筆の〻〻アやむるの風　五渡

ふと時ろ雲地ろつ〻に峨孤

見〻て居る花ふに越しの鶏ろ非

ろろふ寸孤来ろ物ろ綱の既ろ　上サ　我

物ろ〻〻孤既にちろき山ろ既

紡ろ〻〻陳子はけおく蓑ろ敷　寿一

鶏進ふも岩ひはまりろふと猫

加減ろ〻蓑ろ二日は鶏黄ろ事　下サ　貞

ろ〻よのこ蓑き孤ぬけ〻蓑捧　常陸有　珪

面ろれて日ハタろふ雑ろの聲

小雪踏る共紙〻来て黄ろ若葉

身はきす枝形ろ〻〻ろめの花　松塢

むらきれ小を横切ろひろ〻

一二本面を題さて〻ろ発の〻ろ　谷風

六十一の事を逐〻て

老社春残考却り〻ろく歳ふろ

あさ元のたきりをもとも柳ろ敷　信濃湖石

山陰やそらうらひしの夢ふまれ　姑山
板の根やさほかはさまの菜屋　上野翠堂
書初や元旦やそのたれまつ　兼序
おほ雨の自然さは勝のふるまひ　乙瓢
歯はを二度見るおもひ　兼序
雑摘ものも出し　水角
雲やけのひと皮ぬいるる　路の慧
出きはいむろーをうるや　霞松
るる日歌や　鶴の居屋の設
梅ゝ香のはとゝろも来れ野風
入りろえて来るえるめ

金沢古浦

足ものとの魚んかく暖ゝ夕ゝ
蓮香ゝ行合川や　二朗
梅を香ゝ春ゝ月歌ゝ　半湖
尾家ゝ屋敷ゝ茶ゝむ屋敷ゝ
ゝるゝ線亜ゝそうけゝ　玉英
遠山のみゝゝゝ和そいゝめほり　菊外
雲の戸や起て出て　亜花
風あらき新や日ゝまて月と梅　ムツ清民

松ゝ枝をゝりゝて若菜つゝ
歌見へて煙りのたゝぬ日永ゝ　仙臺文人
後をめて風雅をりぬ夕さくゝ　盛岡耕々
紅ゝや余寒ほとゝろゝ中の花ゝ
有明の入ゝ月ゝゝきゝ原なき夕ゝ　馬城
梅ゝ香や妻に成りての暮めゝ　龍山
麦の穂のたゝ中なゝ人ゝ
ゝ上麦ゝそひゝて来て小殿原　泡洋
芽ゝにゝよき春さめ成り里ゝ
ゝ除りや春むたゝゝと法小殿原　一誠
古乃宮ゝとの沙ゝりうめ孔ゝ
ゝゝ見ゝ紅ゝゝとおゝ　登陸
今さゝゝて酢貴ゝ来る山菱ゝ
麦と名の定ゝるおとゝ夕ゝの雨　祐高
きゝゝて来る夕汐ゝきゝ原朱文八
ひゝゝえめゝ麦ゝたのゝゝむ摘ゝ　永山
徽和に去さゝゝき春や　椿窓女
きゝり初子や呉ゝき子ゝ　摘丸
いゝゝも実蓬のゝゝをむや松の中
蓬菜孔ゝひゝゝきゝ教日代

遠山は雪のあらしやえるの雨
あおとのえやふつろーき越う那　抱懐
山里のさゝゝゝゝ又明てゆふりゆ　新年
一二彩家のゆり高支聖うめう紅　玉里
明ー月世新世のすゝゝ梅北月
世出とあき多よもとるや初夏　嘉多
裸木ろえつろにゝゝ垂の月
うゝゝ世きを遠に見せて秋ろ沢多　嘉多
日家中を去ハー峠やむ蛙ろ南　堂雨
えつ赤風のさゝふを作る旦ろ奈
ひらき田を世ゝ茶ろ美や裏の多　蓑洲
山もとやこもと云やと遠原なき
薄うゝ虫ておとを世むや裏の多　一僊
山陰をめ世ろにゝゝ
涙の春をつゝおやゝうろ霧ろ赤　白環
ゝゝ月の絡りて春ろよ揚雲雀　湖雲
雑ろ峠や世にたくゝなき鶯赤　朱寸
鶯ろ松に風のとなれろゝゝるの月
明ろさや茶に蹄の紅ゝゝあらゝ
春山ゝ見元てゆりゝるの面　春邦
馨書

山遠く見て日や懐ろのあろゝ赤
春先ゝ虫さやう生なりゝ初るめ春
降中ゝ地ゝふり去ゝゝゝるの雪
んとところを美昏より抑ゝ那
雪あゝ社せゆしく苦ろ余老ゝ角
見ふ場ゝ峠ゆらハゝゝ雑ろ奈
陽先のゝき多ゝ畑や麦のい沙
歌入れさ畑も見や遠やなき
ゝつ角りを赤風を受多ゝ波任面
山ろに初ゝり日く多ゝ四歩ろ那
多苦社陽ゝて西ろしきもれゝ
咲ゝ多て人待ゝ花のゝ　蔭谷
風先やところくゝにゝ　盆灯
春を今受とる聲ゝのゝゝ　王民
ゝゝ雪多見ゝ苦ゝ越う那　鱗趾
えゝ懐の柏ま立ーまぬそふりゝ
山冷を見ゝて月の玉風沙ゝ
佐保姫も出初る者高おほろめく
引波の春とま来て舞ふ小蝶ゝ
雪のおく世如去ゝやゝ与色の中

逸志　東谷　北斗　祖山　蔭谷　王民　鱗趾　多多　鬼山

糠雨は又ふるとしの田や水芽の出

ふまくゝも更あるあめの末ぶるかな　文来

和戸出ぬ間ゝ見きやゆ雛子ぶるかな

戸明れいまはゝ這入るや梅の蕾　此一

頃ろゝ雲うりむくや多ぶ上

書初や一まはれ　藤日記

庚りまいとこ物も習てを乳ぶる

ぶれさけて花もかゝれしや古筆　松前市頃

夕ゝ春のうゝ物ゝもと乳抑ふ

松枝て見上るそらのひもりふる　江差一門

日くゝやかくても梅の出面し

黄昏のもゝ乳浮乃めくはの弓ぶ　法山

梅ふる雨や若よみふる弓石蛇籠

雪乃方ほくれふとく柳ふ

席旗若ぶゝ松よんら遍ん老を　管館寺兆

稲の乗れ天象にちゝや雑子の方

ちつ花やをつくほと表のつまり　徐蓬

蓼を也笑うのるふらのいきまを

うくとを涙れ物ふゝこをりぶ　出羽素山

枝の向く方残出とし乳元方ふな　嗟風

行春

隆都面を面見てハ表る桜ふ那

渋ゝゝとつと笑ふや祝ひ　行亭

祓うゝ出すも風情や　ふきの基

明る戸の隔も春ゝ世去年出ゝ　春生

見て後の世ゝよ学る也春お浴ゝ

左義出乳けゝきれ海ふや暮の杉　懐道

よゝ咲ふ人れ見ふふ遊為ふ乳

小松ゝよれふ深む乳雨ゝ高弘妻　定机

ゝ世見て多背引ふる乳小松ふな

旬ふ社て梅と表りふ園の中　誠中

冴春ふ乳お年ゝの明ふる稲の表

氣のつふ如不て多乳ゝ佛乃空　有学

氷ふむ表明ゝゝ松のふ見

咲ひとつ出ふハお園ふふしてひ　蘭一

いよ咲ふやふれ見ゝ乃福寿美

初方乳何表乳て見ふふとふゝも表　倉雪

二三遍つるやちり舞ふ屋の髪

友をゝめて

まつ訪れもきゝ梅を表ゝ退ふ乳

花の面余りれ隆れハ明ゝもふる

ミカハ蓬宇

[illegible]

常陸聽 牧

〃 半山

〃

[illegible]

出羽御用役 沒

紀州長沼沒

〃 卓郎沒

寅正月廿六日

同三月九日

同四月十六日

〃

巫年冬柔ノ内

ナコヤ流水 翠ノ誤也 越前契史 越後ノ誤也

大出ノ句山茶花 茶ノ花ノ誤也

毎編校正ヲ加フトイヘ尼誤寫ナシトハ言ヒガタシ甚誤ヲ見出シ玉フ時ハ自他トモニ遠ニ告コシ玉ヘ嗣編ニイタリテ悉アラタメ出スベキ也

龍尾園活字板

校正

卓郎 香城

編輯 寄泉 大毛

補助 思樂

活字 風齋